



TITLE:

臨床経過と脳波像の推移から観た  
熱性痙攣( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

狩野, 正弘

---

CITATION:

狩野, 正弘. 臨床経過と脳波像の推移から観た熱性痙攣. 京都大学, 1966,  
医学博士

ISSUE DATE:

1966-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211801>

RIGHT:

【206】

|             |                         |
|-------------|-------------------------|
| 氏 名         | 狩 野 正 弘<br>かり の まさ ひろ   |
| 学 位 の 種 類   | 医 学 博 士                 |
| 学 位 記 番 号   | 論 医 博 第 275 号           |
| 学位授与の日付     | 昭 和 41 年 3 月 23 日       |
| 学位授与の要件     | 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当 |
| 学 位 論 文 題 目 | 臨床経過と脳波像の推移から観た熱性痙攣     |

論文調査委員 (主 査)  
教 授 永 井 秀 夫 教 授 村 上 仁 教 授 半 田 肇

論 文 内 容 の 要 旨

著者は過去6年間に95例の熱性痙攣患児を経験し、このうち61例について観察期間中2回以上脳波検査を行なった。

症例の選択にあたっては、初診時まで無熱性痙攣のあったものは除外し、また中枢神経系の急性炎症やその他中枢神経系のあきらかな異常の認められるものも除外した。

95例のうち66%は男児であった。また78%が3才未満で発病していたが、5才以上の発病も7%に認められた。両親あるいは同胞に熱性痙攣を有する症例は32%であった。

熱性痙攣を発現した症例の大多数は急性気道感染症の第1日目におこり、体温は38°～39°C台のものが多く、殆んどが数分間つづく全身痙攣であった。

88例にのべ169回の脳波検査を行なった。正常脳波像121, 境界脳波29, 異常脳波像21であった。痙攣発現から脳波検査までの日数と脳波所見との間には認むべき関係がなかった。一方、脳波検査までに経験した痙攣の回数が多い場合の脳波には、異常を示す例が多く、1回のみのももの(41例)のうち正常でないものが15%あったのに対し、4回以上のももの(71例)では37%が正常でなかった。

2回以上脳波検査がなされた61例について、脳波の総合所見と臨床像との関係を調べるため、症例を4群に分けた。即ち、A群(正常群)はすべての脳波が正常であるもの、B群(改善群)は初回正常でなかったが、後に正常化したもの、C群(境界群)は初回の検査が正常または境界像で、後に境界脳波と判定されたものであり、D群(異常群)には初回異常を示し、その後も正常とならなかったもの、および初回の成績には関係なく後に異常を呈したものを含めた。各群はそれぞれ40, 9, 6, および6例であった。

成績は次のようであった。

1) 発病年齢最後の発作の年齢については、各群の間に認むべき差異はなかった。

2) 発作が1回のみで終わった14例は、1例を除いて脳波は常に正常であった。これに対し、発作回数の多いものほど能波像の異常または悪化がみられた。

3) 最近の発作以後の無発作期間の長短は、脳波像の推移と明らかな関係がみられ、また観察期間中の痙攣発作の有無またはその回数も同様の関係があった。即ち無発作の期間の長いものほど、あるいは観察期間中の発作の回数の少いものほど脳波像は良好であった。そこで2回の検査の間に介在した痙攣発作が脳波に与える影響を調べるため、症例をこの期間の間に発作のあったものと、なかったものとに分け、脳波像の悪化したものと、改善を示したものとを割合を比較してみた。発作のあった25例では悪化例32%、改善例24%であり、発作のなかった36例では悪化例、改善例ともに8%であり、両者の間には一定の傾向はみられなかった。

4) 痙攣発作の持続時間の長短については、脳波像との間に有意な関係は認められなかった。

なお、95例中5例は現在てんかん様であり、うち3例は無熱痙攣をみるが、ほかの2例は未だ有熱時のみに痙攣を来す症例である。

### 論文審査の結果の要旨

熱性けいれんは、てんかんと関連性の有無が論ぜられるようになってから、とくに注意をひいているが、その予後、本態を論ずるためには臨床経過と脳波像の推移を長期にわたって観察したうえで論ぜられなければならない。著者は95例の熱性けいれん児の経過観察と88例、のべ169回（うち61例については2回以上）の脳波検査をおこなった。正常脳波ないし境界脳波それぞれ121例、29例に対して、異常脳波は21例に認められた。脳波像の推移と臨床上の経過および転帰と対比してみて、次の諸点があげられた。

1) 観察期間中にけいれん回数の多いものほど異常脳波を示した。2) 2回の脳波検査間に起こったけいれんの程度ないし回数が第2回目の脳波像にいかに関与するかを検討した。その結果、けいれん発作のあった25例のうち、脳波像が悪化したもの8/25に対して改善例は6/25で、両者間に大差がなく、また一方、発作のなかった36例においても、悪化例と改善例ともに8%であって、ここにも差が認められなかった。すなわち、熱性けいれんの発作そのものが脳波像を悪化させるということは認められなかった。3) 熱性けいれんは潜在性てんかんに因するという説もあるが、それを支持する成績はえられなかった。しかし、95例中5例にてんかん様発作をみ、うち3例に無熱性けいれんをみることは、発熱を動機とするけいれんのうちに両者が混在するものと思われた。

本論文は、学術的に有益であり、医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。